

特定非営利活動法人炭の木植え隊設立趣旨書

日本を含め世界中で木炭は古くから利用されてきました。日本では木炭作りに必要な原木は、薪炭林から伐採されて、人の手で再生されて持続的な生産が行われてきました。いわゆる里山はこうして人の手で作られてきた薪炭林の姿です。残念ながら日本では昭和30～40年代のエネルギー革命により、木炭はガスや電気に置き換わり衰退してしまいましたが、昭和の終わり頃から平成の時代になるとアウトドアブームや炭火焼きのおいしさが見直されたこと、さらには木炭の持つ吸着性に着目した新しい利用方法が開発されたことなどから木炭の需要が回復し、今は昭和40年代の需要量まで回復しています。

その一方、長らく放置されてきた日本国内の薪炭林は、手入れする人の減少や高齢化によって往時のような姿には戻らず、木炭原木の生産の観点からも多様な生物の生息域の観点からも、また、見た目という点からも十分な機能を発揮していません。回復した国内の木炭需要を補うために急増した海外からの木炭輸入も今は全体需要の8割以上を賄うまでになりましたが、その木炭の原木は持続的な森林管理の下で生産されたものかは全てを確認できていません。

木炭は世界で一番古くから、一番多く使われている再生可能エネルギーです。ただし、再生可能エネルギーであるには持続的な木炭原木の生産が行われていることが前提です。

森林を守るには木を伐らないこと、それは例えば原生的な森林では正しいことです。しかし過去に人の手が加わったような森林では木を伐ってその森林に住む人々の生計が維持され、その人々によって次世代のために新たな森林作りを行うというサイクルができていたことも森林を守る大切な仕組みと考えております。木炭はそのサイクルにピッタリと当てはまる地球に優しい製品です。

私たちはこのような考えの下、それぞれの立場で木炭を通じて日本の、世界の森林を守り、再生する活動を行ってきました。具体的には業務用木炭の主な輸入先であるラオスにおいて2000年から毎年、木炭原木の森の造成を行ってきました。また、2000年以前から日本国内の薪炭林である里山の整備や木炭作りを指導してきました。さらには日本と途上国の交流に貢献してきました。これらの活動は個々のメンバーが個人で、あるいは所属する会社や組織の資金や人脈などを活用して行ってきました。いずれのメンバーも営利を目的とせず、それまでの人生経験から得た奉仕の精神や他者を思いやる気持ち、人として生きる道を基とした活動でした。しかし個別の活動には限界を感じる点がありました。そのため、今回、思いを同じくする者が結集して非営利活動法人を設立し、団体として次の3点を主な目的として活動を行うこととしました。

1. 日本国内及び途上国において木炭の原木となる森作りを行う。
2. 木炭の原木の森を作る地域の住民の福祉の向上に寄与する。
3. 木炭の原木の森作りの活動を通じて日本の農山村、途上国との人の交流を図り、その国と日本の友好関係に寄与するとともに、日本の農山村、森林・林業の活性化に貢献する。

これまでバラバラに行われていた活動が一つの非営利活動法人炭の木植え隊の下に結集することにより相乗効果が発揮され、少しでも世界や日本の森林・林業が良くなり、そこに暮らす人々の生計が向上することに貢献できればと決意を新たにしております。